領域を超えた「からだの教育」の必要性

東方美奈子
体育科学系技官

「からだの教育を考える」というテーマのもとに寄せられた19本の論考のうち、多くが大学体育に関わるものであり、次いで大学における健康教育に関わるものであった。私はこの全体的な傾向に、意外な印象を受けた。テーマから、もっと多様な議論が展開されるのだろうと想像していたからである。確かに巻頭言の文章から察すれば、編集の方向性として「大学における体育」が議論の中心となることを理解できる。しかし特集の目的が「生きる力」に関わらせて「からだの教育」を考える点にあるとすれば、このテーマは体育、健康教育だけでなくとどまらない、もっと射程の広いものとなるであろう。

たとえば森田啓氏は、こどものコミュニケーション能力不足に対応して、スポーツなどでの楽しい経験だけでなく、疲れ、痛み、怖さなどの否定的な感情を生み出す体験が必要であり、それが他者への共感につながることを指摘している。

また、亀山佳明氏は「からだを取り合う」経験がコミュニケーションの根本であり、スポーツをはじめ、現場に出かけ、からだを使って他者と共同しながら、現実を変えていくという作業こそが、彼らにともない必要であると述べる。

このように、生きる力を育成する「からだの教育」は、アレルギーなどの「身体」そのものの危機はもちろんのこと、感じたときに手が出ないという「身のことなし方」の衰え、コミュニケーションの土台としてのからだの未成熟さ、からだ同士のぶつかり合いの減少による他者への想像力の鈍感など、人間として生きる根源的な能力全体に関わって、体育や医学などの領域にさまらない課題である。

この点からすれば、観光大学のメリットが国立大学で体育専門の学部をもっている点にではなく、体育専門の学部が総合大学の中にある点にある。「からだの教育」について、「学生自身のからだの教育」と、社会的な問題として「からだ」について学習する「からだ（についての）教育」という2方向から、体育領域の知見を生かしつつ、それをを超えて学際的に総合的に捉えることができるのである。

人間総合科学研究科はその象徴であり、存在意義は、まさにそこににある。

（とうほうみなこ スポーツ社会学）